□随想□　私と神戸

神戸・わが友余多（あまた）

小池　一夫〈作家〉　絵／灘本　唯人

森真珠の森隆さんに、広野ゴルフ倶楽部へ連れていっていただいた。もう二十年近くも昔のことである。それがゴルファーとしての憧れ、広野との最初の出会いだった。

「広野を見ずして、ゴルフを語るなかれ」

見て、語るだけでなく、会員（メンバー）になりたいと願った。夢が一つ生まれた。

時を得て、ポートピアホテルの中内力さんに、乾豊彦理事長をご紹介いただいた。

「東京在住の方が、神戸で倶楽部の会員としての責務（つとめ）を果たされるのは大変なこと」

できますかとの問いに、私は「果たします」と約束し会員にしていただいた。後になってこの大変の意味を実感した。倶楽部の初夢杯、新年杯は一月二日と三日に行なわれる。会員は何をさておいても出席し、新年の喜び、倶楽部の発展を願う。先輩各位への年賀の挨拶も欠かすわけにはいかない。

勿論私は元旦に、喜々として新幹線に乗り広野詣をしていた。五年目ぐらいだったろうか、母に一言、言われた。

「また今年のお正月も家を空けるのですか」と。

神戸は、広野の会員となってから特に故郷のように身近なところになった。私はそれまでにも神戸で、コミックを教える塾を開講し、余多の弟子たちを育て、各方面の方と交流もあり、さらにゴルフコンペも主催していた。それでも何か、どこかが違っていたような…。ところがそんなものは会員になったことを契機に一変した。

いまでは私を神戸在住の作家と思っておられる方もいる。加うるに、サンテレビ社長の中内守さんに依頼され、ゴルフのTV番組を持ったことにもよる。高視聴率に支えられて4年目に突入した。

新幹線の改札を通るとき、駅員の方々にも声をかけられる。コースでも風呂場で裸談義の仲間にさせられる。ゴルフの評論家かシニアのプロと思っている方も多いようだ。

ま、それでもいいか。

神戸わが街。自分でもそう思いこんでいるところがある。

「こんど食事（たはんたべ）でも」と、誘われる。関東では社

乾理事長の訃報に接したときは、神戸への車中、あの笑顔ばかりが脳裏に去来した。それもちょっと横を向いて笑う、独特な照れ笑いのような……。

告別式は雨だった。私は雨の中を歩いて、式場へ向かった。合掌しながら、あの笑顔の写真を集めて、私の主宰する雑誌に掲載させていただこうと、勝手に決めた。

（アルバトロス・ビュー　161号に掲載）

アマ界の最高峰、中部銀次郎さんが「ゴルフをプレイする人は多くなったが逆にゴルファーは少なくなりました」と、私に呟かれたことがある。私が広野の会員になれたのは、乾理事長にゴルファーとして認められたということに他ならない。その自覚を持って、コースに臨みたい。私のゴルフ人生、これからのすべてに。

「どうして歯の治療まで神戸なのですか?!」と家人に聞かれる。歯の治療で神戸まで通うのは、はなはだ不思議に思えるらしい。その理由はいたって単純。歯科医の上村恭弘さんが友人だから。三田国際ゴルフ倶楽部の片山開理事長、樽本久キャプテンとも仲良しで毎年秋にはコース内の松林で採れる贅沢な松茸入りすきやき鍋をご馳走になる。

ことほどさように神戸、わが友の多い街である。

交辞令の面もあるが、神戸では食事に誘われることは、相手が胸襟を開いてくれた、つまりこちらを友だちと思ってくれたことの証拠なのだ。

心を通い合わせるということは、それを断たれることと背中合わせでもある。

御手洗博康さんの突然の死は、私にとって痛みをともなった深い哀しみだった。神戸には、いつも彼の豁達で明るい声が待っていた。

「センセ…」。聞こえたような気がしていまでもふっと振り返ることがある。

<小池一夫氏のプロフィール>
作家。ゴルフ誌アルバトロス・ビュー主宰。サンTV「小池一夫の週刊至美ゴルフ」では総合司会を担当。'93春には自身で製作総指揮のもとに映画「子連れ狼その小さき手に」を公開。現在毎日新聞にて小説「夢源氏剣祭文」を連載中。

●新春さわやか対談

こころのふるさと〝但馬〟理想の都から新しいライフスタイルの創造を

貝原 俊民〈兵庫県知事〉
高島 進子〈神戸女学院大学教授〉

★〝こころのふるさと〟を見つけるために

高島 あけましておめでとうございます。

知事 おめでとうございます。

高島 いよいよ新しい年がはじまりましたね。

知事 今年は、関西国際空港から一番機が飛ぶこともあり、関西は新しい時代を迎え、国際交流もますます広がっていくでしょう。外国から訪れた方はよく、日本の緑が多いことに驚かれます。北は日本海から南は太平洋までの広大な県土を擁する兵庫県にも、美しい緑がたくさん残っていますが、とりわけ豊かな自然に恵まれた但馬で、この四月から「但馬・理想の都の祭典」が開催されますから、人と自然との交流について、今一度、考えるよいチャンスだと思います。

高島 私も但馬を知ることによってはじめて、兵庫県はこんなにも広くて、深いのかと実感致しました。昭和三十五年当時の但馬地域の写真を見ますと、農家の方が、田畑のなかに牛やコウノトリと一緒に立ってらして、とても牧歌的で美しいですね。いま、都市に住む人たちの生き方も大きく変わりつつありますが、豊かな生き方を実現させるためには、広く、いろいろな地域で暮らしている人たちと交流することは大切なことでしょうね。

知事 阿久悠さんに祭典のテーマソングを作詞してもらったんです。その歌の最後に「こうのとり帰るころ　私も帰る　但馬へ　ふるさとへ」という一節があるんですが、但馬の人ならともかく、そうでない人が帰る〝ふるさと〟とは一体なんだろうかと考えこんでしまいました。

そんな時、兵庫県出身の作家、杜山悠さんが自ら編集された文芸誌のなかに、

「あしたの故郷、すなわち、人が、やがては、人らしい本然の姿に立ちもどることのできる日、自然と倶に自然人らしく生きることが、誰が何といおうと人にとって、いちばん仕合わせだとわかった日、そういう時の、人間の故郷は、実は、回帰的故郷ではなくて、今の私たちの未来に位置する故郷ではないか」。つまり、〝ふるさと〟とは単に生まれ育ったところをいうのではなく、人

間が本来の姿に還って生きることを感じさせるようなところだ、

と記されているのを見て感動しました。おそらく阿久さんの〝ふるさと〟も、そういうところなのではないでしょうか。

高島　〝ふるさと〟というのは、人間が生きていくための拠りどころ、時にそこへ還って自分を見つめ直すようなところだと思いますね。二十世紀は、人間が自分たちのつくった政治組織や経済、各種技術の背後に落後して、自然とのつながりを失い、人間社会のまっただなかで他者と隔絶されて孤立してしまっているといわれます。私たちは、〝ふるさと〟を見失ってすでに久しいのではないでしょうか。

下山手通の兵庫県公民館にて

知事　昨年の国民生活白書のなかで、国民はバブル経済を経験することにより、物の豊かさだけがすべてではないことを実感し、これからは家庭や地域、自然などとのふれあいを求める傾向にあると分析しています。そういう意味では但馬のように、人間らしく生きることができる〝ふるさと〟を見直すことが大切なのでしょう。それは過去の回帰的な〝ふるさと〟ではなくて、私たちの未来に位置する「あしたのふるさと」を、但馬の人だけでなく、たとえば神戸や姫路の人も但馬を訪れ、改めて考えてみることだと思うんです。

高島　〝ふるさと〟で、もう一度自然や人とのかかわり、自分を見つめ直さなければならないということですね。

★家族は〝共立ち（ともだち）〟関係

知事　いま日本では、子供の出生率が低下してきているんですね。人口を持続的に維持していくためには、平均して一人の女性が二・〇八人の子供を出産する必要があるのですが、日本の平成四年の出生率は一・五〇人なんです。アメリカやイギリス、フランスあたりでも一・八人を超え、出生率の低かったスイス、ドイツ、スウェーデンでも低下に歯止めがかかっているというのに、日本では低下しつづけています。しかも兵庫県は全国平均より低くなっているんですよ。ところが、但馬一帯にかけては、出生率が二・〇人を上回っているところが多く見受けられるんですね。

高島　但馬地域では三世代同居が多く、親が安心して子供をあずけて働きにでられるということがひとつの要因かもしれません。さらに但馬は、豊かな自然環境や居住環境にも恵まれ、人間が育つ総合的な力が地域にあるのでしょうね。

貝原俊民兵庫県知事

但馬の例を見ていると、温かい地域社会のなかで生活し、子供から高齢者まで、家族全員が地域社会の一員として、それぞれが立派な役割を担っているんですよ。

高島　共生ということでは、長寿社会で高齢者のご活躍も期待したいですね。

知事　プロダクティブエイジングという言葉がありますが、但馬では、地域の担い手として、高齢者の活力が生かされていて、老若男女が一生懸命にそれぞれの役割を果たすという関係ができています。

ですから、「但馬・理想の都の祭典」での多彩な交流を通じ、人々が持っているそうした可能性をさらに引き出すと同時に、都会の人もそこへ行って、もう一度家族というものを考え直してもらえればと思っているんですよ。

高島　阪神間に住んでおりますと、何かもの足りないような、時に危険な気持ちになることもあります。しかし、但馬を知ってはじめて、〝兵庫っ子〟としてなら自分がトータルに生きていけると安心致しました(笑)。但馬には、人間性を回復させるような環境やさまざまな可能性が眠っていますから、縦横無尽の交流を通して、ともに人間の知恵や文化を結集して、私たちの「あしたのふるさと」を創造していきたいですね。本当の豊かさというのは、自分の内に、あるいは社会のなかに、どれだけ多様な働きや交流を包括しているかということではないでしょうか。

★但馬はいま、新しい時代へ

知事　いまの話にもありますように、但馬は兵庫県民に

知事　そこには人間が循環的、持続的に生きていける人間としての生活条件が残っているんですね。

高島　今年は国際家族年ですが、家族というのは〝共立ち(ともだち)〟関係、ともに立つ関係だとよく話すんですよ。つまり、子供や高齢者も含め、お互いがひとり立ちできる、自立して生きていけるようにお互いに支え合う関係が家族だと思います。そういう意味では、家族は、ともに支え合いながらともに育っていく、核になるようなひとつの社会ですね。地域というのも、助け合いながら生きていく社会ですが、これからは、家族がもっと地域のなかに開かれていくようにすることがひとつの課題ではないでしょうか。

知事　国際家族年のテーマが「家族からはじまる小さなデモクラシー」となっています。

高島　小さな社会から民主主義をという意味ですね。

知事　まさにそういうことですね。共生の理念に裏付けられた家族関係を再構築しなければ、二十一世紀は危ういんじゃないでしょうか。

とって大切なところなんです。ところがいままでは、大都市圏から四時間も五時間もかかっていましたので、ともすれば忘れられたような存在になっていたんです。

高島　但馬を「たじま」と読める人も少ないのではないでしょうか。

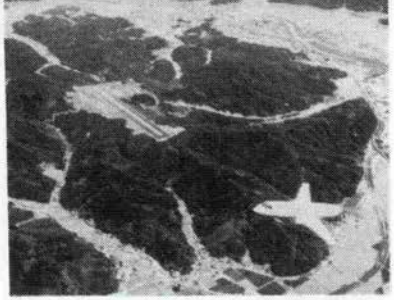
知事　高速交通といえば新幹線、高速道路、飛行機の三つがまず考えられますが、その駅や、インターチェンジあるいは空港から一時間で行けないような高速交通空白地域が全国にいくつかあり、そのひとつが但馬だったんですよ。

高島　幸い、播但連絡道路など高速交通網の整備も進展していますし、但馬空港も開港します。また、神戸からヘリコプターを飛ばす計画もあるようですね。そういった意味では、非常に楽に行けるようになりますね。

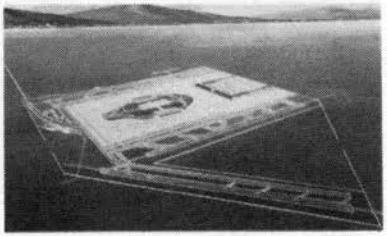
知事　労働時間も短くなり休日も増えたなか、これからは時間ができるとすぐ外国旅行へという時代ではなくて、身近なところを見直すというライフスタイルになっていくと思います。

　現に最近顕著なのですが、阪神間の都市と但馬の町とが友好提携する動きが活発になってきています。たとえば、西宮市が山東町に教育施設を、また尼崎市が美方町に保養施設をつくっているんですね。さらに、神戸市でも日高町に青少年施設を建てる計画をしています。このように都市と農山村の連携が知らずしらずの間に広範囲で行われているんですよ。人間らしい生き方、自然や家族とのふれあいを求めていくようになってくると、やはりこころのふるさととして〝但馬〟に行ってみようということになってくるでしょうね。

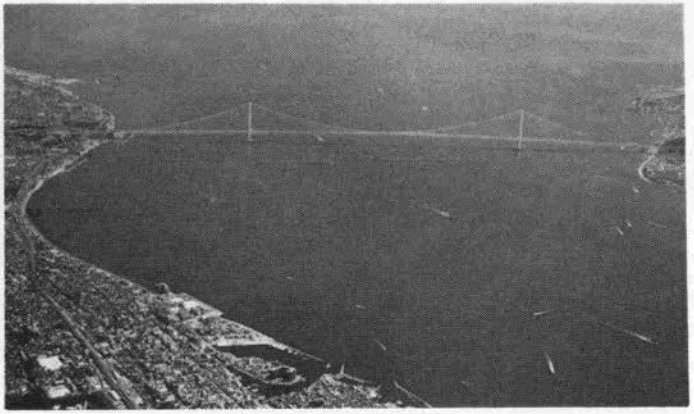
高島　いま、生活が豊かになり、文化的な欲望も非常に高くなり、多様化しているなかで、一人ひとりが自分なりにトータルに生きたい、生きようと思っています。兵庫県では、その全体を生活の場とすることによってはじめて、かなりトータルな生き方ができるのではないでしょうか。そのなかから〝兵庫っ子〟の意識、県民意識も育ってくることでしょう。



但馬空港完成予想図



関西国際空港完成予想図



明石海峡大橋完成予想図

★〝リゾートアーバンフェア〟で交流の舞台づくりを

知事　その点、神戸や阪神に住んでいる外国の人々は、休みの日には豊かな兵庫の自然と親しむような生活を一足先に実践されていますね。昨年神戸で、「アーバンリゾートフェア神戸'93」が行われましたが、県では「リゾートアーバンフェア」をやろうと言ったんですよ(笑)。都市にリゾートの考え方を持ち込むというのがアーバンリゾートの考え方だったんですが、但馬というリゾートにアーバン感覚を取り入れ、イベントを通じて都市と農山村の交流を広げるような舞台づくりをしようということなんですね。

この「但馬・理想の都の祭典」では、今年四月九日から約一年間かけて、但馬地域全域を舞台に、世界の冒険家といわれた植村直己など多くの偉才を育んだ但馬の「人・海・森・里・空」をテーマとする五つの文化展をはじめ、四季を通じて三百を超えるユニークなイベントが展開されます。そうしたなかで、県民の皆さんのこころに「あしたのふるさと」を追い求めていこうという気持ちがみなぎってくれば、祭典の目的はほぼ達成されたと考えています。いま、但馬一市十八町は非常に張りきっておられますしね。

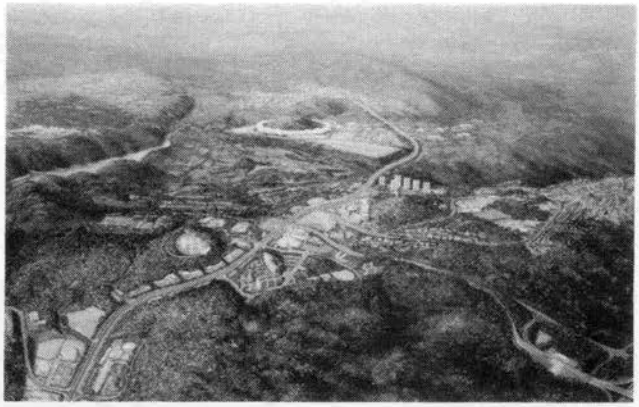
高島　私も祭典アドバイザーとして、祭典を契機にライフスタイルや価値観の転換を促すという、出来事といいますか、〝但馬事件〟を起こそうと張りきっています(笑)。いろいろなイベントがありますが、五つの文化展のひとつである大但馬展には、興味がありますね。但馬は立派な芸術家や学者、宗教家や政治家、教育家を輩出していますが、気候も含めた自然環境と歴史や文化がひとつになって風土がつくられ、その風土が個性や人格を生みだすのではないでしょうか。

なぜそのような個性や人格が生みだされたかを考えてみることも、但馬をもう一度見直し、誇りを持つ大きなきっかけになる気が致します。そのあたりを大但馬展で確認したいですね。

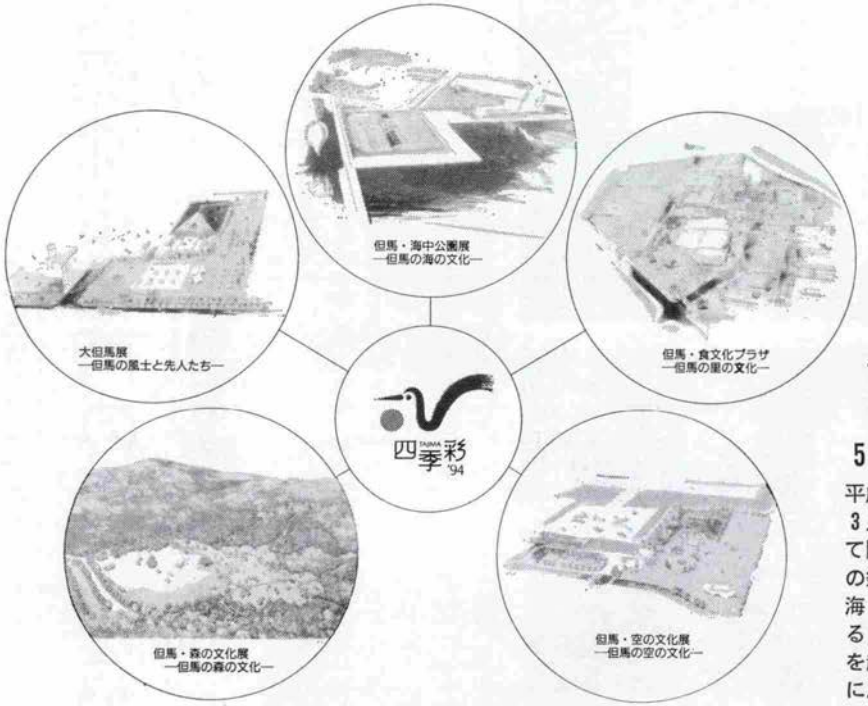
知事　たとえば、円山川の治水に多大な功績を残した但馬の開祖・「天日槍(あめのひぼこ)」が新羅の王子だったことから、いまでも韓国の慶州市と出石町とは友好的な交流が続いているんですよ。神戸では昔からアジアやヨーロッパとの交流が盛んでしたし、兵庫県ではそれぞれの地域が、外国と交流してきているんですね。

高島　社会にはさまざまなレベルでのまとまりがありますが、いまは地球時代、国際化の時代でもあります。兵庫のなか、日本のなかの但馬だけではなく、環日本海交流の課題も含めて、世界のなかの但馬を同時に考えていきたいですね。

★新創生する兵庫・関西



播磨科学公園都市構想図



但馬・四季彩'94

5つの文化展

平成6年4月9日から平成7年3月18日まで344日間にわたって開催される"但馬・理想の都の祭典"。四季を通じて「人・海・森・里・空」をアピールする5つの文化展をはじめ、300を超える多彩なイベントが次々に展開されます。

知事　これからの国際化社会を考えると、関西の果たす役割がとても大きくなってきます。世界最長の吊り橋となる明石海峡大橋、新たな学術・研究開発の拠点となる関西文化学術研究都市、世界一の大型放射光施設（SPring—8）を核とした播磨科学公園都市など、二十一世紀の関西の基盤となる国際的なプロジェクトが着々と進展するなかで、いよいよ九月には関西国際空港が開港します。

そのインパクトを生かし、今年を、〝新関西創生年〟と位置づけ、たとえば明石海峡大橋の完成する一九九八年は、〝コミュニケーション〟というように、関西が進むべき二十一世紀像を毎年テーマにして近畿各府県が手を取り合い、十年間かけてリレー方式でイベントを開催してはどうでしょうか。「但馬・理想の都の祭典」で「あしたのふるさと」を再認識するのと同様に、関西人が関西の持てる可能性を再認識するなかで創意とエネルギーを結集し、世界に向けてアピールしていければ、すばらしい関西が誕生することでしょう。

〔兵庫県公館にて〕

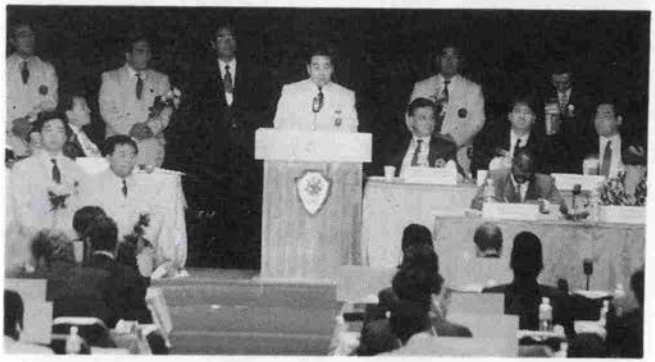
国際都市神戸の新たな飛躍を約束するJCI世界会議神戸大会

神戸は、明治の開港以来、常に外に向って開かれて来た街である。様々な情報を海外から取り入れ、また、海外へ向けて発信して来た。国際都市としての都市機能をハード、ソフト両面において、ますます強固なものとしていこうとしている。

本年（一九九四年）十一月、十日間にわたってJCI（国際青年会議所）世界会議神戸大会が開かれる。

これは社団法人神戸青年会議所（JC）が、数年にわたる運動によって、JCIの記念すべき五十回大会を神戸に誘致したものである。

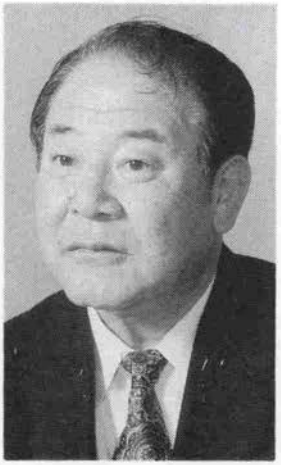
今回は、神戸青年会議所のOBおよび現役の方々に、JCI世界会議神戸大会開催について、それぞれの立場からコメントをいただいた。（なお小誌では、このあとも随時、最新の情報を読者に提供していく予定である）



JCI世界会議'93香港大会での様子

●JCI世界会議神戸大会への期待

先ず現代の状況の正しい把握を



木下　健
<(社)神戸青年会議所13代・昭和46年度理事長>

神戸青年会議所（以下神戸JC）は、昨年('93年)、創設三十五周年を迎えましたが、これまで一度も国際会議をもったことがありません。昭和四十六年に神戸JCを卒業してから、二十二年間、シニアクラブ（OB組織）世話人代表として、神戸JCに深く関わってきた立場から見ると、今回、世界会議が神戸で開催されるのは、非常に喜ばしいことです。

JCの大きな特徴の一つは、「四十歳定年制」です。絶えず若さを保ちうる団体なのです。構成員の年齢の若さ故に、時代のニーズや潮流を敏感に感じとることができます。地域に根ざす若手経済人の団体として、時代を先取りし、果敢に実行してゆく。そのためには、JCメンバー同士の連携のみならず、行政（県・市）とも、市民とも密接なつながりと協力が不可欠です。商工会議所や経済同友会などの経済団体よりも若い年代のものが、神戸の将来を見越して考え、話し合い、行動をおこしていくことの意義は大きいと思います。

神戸JCには、OB組織としてシニアクラブがあります。もちろん卒業した人すべてが所属している訳ではありません。JCというのはあくまでも、現役が活動の主体です。ただ、現役を卒業しても、時を同じくJC活動をしてきた者たちが、年に何度か会って話をしたり、友好を暖めるのもええやないかということがあり、皆さんの合意を得て、シニアクラブというものを組織している訳です。会員相互の親睦を図ると共に、神戸JCの活動を後援することを目的としています。おそらく、全国JCの中で、このようなシニア組織を持っている支部は稀ではないでしょうか。

JCI世界会議は、神戸大会で五十回目になります。そういう大きな節目の大会であると共に、神戸で初めての世界会議ということで、OBも期待を寄せています。OBにとっても神戸で世界会議を開催することは長年の夢でした。それ故に、官公庁、企業をはじめ、市民の皆さんにも協力を要請し、成功することを切に願っています。この機会に、JC活動に対する理解を深めてもらえればとも思っています。

プログラムなど内容の詳細については現役の方でまとめていますが、それに関して、シニアの方々が私を含めて口出しするということはありません。現役が作ったプログラムに沿って、OBがどういう応援の仕方ができるかということを、今模索しています。今後内容が煮詰まっていくに従って、財政的な面も含めて手を差し伸べたい。そのために、我々は「JCI世界会議支援委員会」を組織し、支援体制を準備中です。

折しも深刻な不況の中で、財政的には、〝費用をかけないような工夫〟も必要だと思います。時代の背景や現状を正しく把握した上で、その中でのJC活動でなければなりません。現役会員の各々の経済的負担をできるだけ軽減するような工夫を通じて、この記念すべき世界会議を、是非とも成功に導いて欲しいものです。

●JCI世界会議神戸大会への期待

「内なる国際化」を進める機会に

西村　理
〈(社)神戸青年会議所30代・昭和63年度理事長〉

JCI世界会議が神戸で開催されることは、その経済波及効果もさることながら、神戸の街や、神戸青年会議所という組織、メンバー個人の意識を変えていく良いきっかけになると思います。その意義について主に次の三点を指摘したいと思います。

今でこそ多くの企業が、神戸に支社あるいは支店を置いて、重要拠点として事業を展開していますが、ひと昔前は第一次円高不況の影響もあって、神戸の位置づけは大阪支店神戸出張所といった程度の重要性しかありませんでした。また神戸は「国際都市」を標榜しているにもかかわらず、アメリカ総領事館の大阪移転に代表されるように、〝国際的な受け皿〟の整備が不十分でした。こうした現実に歯止めをかけ、神戸の位置づけを高め、さらには街づくりと街の活性化にJCI世界会議の神戸開催が寄与するのではないか。そう考えたのが誘致理由の一つです。

次には「内なる国際化」も必要なのではないかと考えました。私たちは、最近海外旅行などを含めて、外にでていくかたちでの国際化についてはずいぶん熱心なんですが、自分たちの国や街の「内なる国際化」については非常に苦手です。元来の日本における国際的イベントは、日本人の自己満足に終わるものが多かったのですが、どうすれば神戸を訪れる外国の方々と〝真の交流〟ができるか……人間同士としていかに〝相互理解〟ができるか……それを神戸に住む私たちが考え、実践していくことが「内なる国際化」だと思います。世界会議はそのための良い機会となるでしょう。

三つめとしては、神戸青年会議所という組織を鍛えるということです。

神戸青年会議所はモンロー主義（孤立主義）のような一面を持っていましてね。誰に頼らずとも一応程度のことは自己完結的にやってしまうことができる組織なんです。しかし世界会議になるとそうはいきません。日本国内はもちろんのこと世界中からたくさんの人々がやってくる。

当然今までの組織のあり方を越えて、日本内外の青年会議所のメンバーはもとより行政・経済界・市民の理解と協力をえなければなりません。世界規模の会議なので開催には非常な苦労を伴うでしょうが、その苦労を厭わないことが大切です。

神戸青年会議所現役メンバーのみならずOBも一致協力して整備にあたっており、私も海外でのキャンペーンには必ず参加しています。当然メンバーひとりひとりには、それぞれの役割分担がありますが、中には開会期間中の十日間駐車場係という人もでてくると思います。しかしその人の仕事は、華やかな大会式典と同様に大会成功に欠くべからざる役割なのです。立派に駐車場係を終えた人がその他の役割のメンバーともども大会の成功に涙するような感激もきっとあるはずです。「やった者しか得られない」「やった者しかわからない」そんな感動の渦が、そこかしこに生まれる世界会議になって欲しいと念願しています。

●JCI世界会議神戸大会への期待

神戸の街に何かを残す大会に

福井　有
〈(社)神戸青年会議所33代・平成3年度理事長〉

JCI世界会議というのは、四十万人のメンバーを擁するJCIのおよそ百カ国の国の代表が集まって、次の一年間の行動目標の決定、会頭・役員の選出、四つあるエリア会議のそれぞれの方向性の決定等を行う大変大きな会議です。そのJCIも'94年で五十周年を迎えるのですが、その記念の大会を神戸で開催できるというのは非常に幸運なことです。これは'91年私が理事長の時にヘルシンキ大会で決定したものですが、'94年の神戸では特別なことをやってくれるといった、JCIのメンバーの大きな期待がひしひしとこちらに伝わってきており、その責任の重さを卒業した今も感じています。

今度開催される神戸の大会はポートアイランドが会場になりますが、施設については非常に恵まれており自信を持っています。というのも、ヘッドクォーターとなるホテルの回りに、コンベンションホール、小さな会議場、レストラン等がいずれも歩いていける距離内に密集しているからです。しかし、施設が整い、人さえ来ればコンベンションが成功するというものではありません。JCの先輩方の話によると、少々施設が悪くても、主催した国や都市のJCが一生懸命やっていた大会が良かった大会と言われることが多いそうです。ですから今度の大会では、施設がいいから手を抜いたと言われないよう、恵まれた施設をより上手に生かしたソフト面の充実を図ることが大切だと考えています。もちろんそこには、会議の参加者のみならず同伴する家族へのホスピタリティー、空港・駅から会場までのアクセスの問題、地域とのコミュニケーションなど、幅広い事柄の配慮と気くばりが要求されることになると思います。

今度の大会では約一万五千～八千人が集まる、「コンベンション都市」を標榜する神戸でも最大規模の大会になります。日本のJCの全国大会以上の大会を運営した経験が神戸JCにはありませんが、今度世界大会を主幹・運営することで、そのノウハウをJCに残すことは大変有意義なことです。同時に、神戸の街にどれだけ貢献できるか、市や地域の人々にどれだけ共感を持ってもらえるか、ということを考えながら、今度の大会が「我が街のJCのメンバーが五十年続いたJC運動の過去のおさらいと将来に向けての展望を図る大会を作りあげている」というふうに、市民の人々に理解してもらえるよう努力することが大事です。そういうことからも、今度の大会がJCのメンバーが集まってワイワイやっているということだけで終わったのでは意味がありません。神戸を知らない人々に神戸のことを知ってもらう契機に、またこの大会が神戸の街や市民の人々に何かきっちりしたものを残した、というものでなければなりません。

大きな大会を開催し、運営するということは大変なことです。しかしその大変さは時代に残る大変さであって欲しいと思っています。そういった意味で、「グローバル・コミュニケーション・フォー・ディ・アース」を掲げる今度の大会が、JCのメンバーにとっても市民にとっても実り大きなものであることを願って止みません。

●JCI世界会議神戸大会への期待

開催は一過程 その先が重要

永田耕一
〈JCI世界会議'94神戸大会実行委員長〉

世界会議にはJCとしての、日本JC、また神戸JCとしての、そして神戸のまちにとっての性格と、それぞれの意味合いがあると思うんです。

JCIでは五年毎に取り組んでいくべき大きなテーマを決めていまして、この5年は「地球市民の時代」であったんですが、今回の大会は五十周年に当たることから、先ずこれまでの活動を総括することが必要になります。そして、私達は今テーマとして「グローバル・コミュニケーション」という言葉を考えているんですが、JCのメンバーにとってもまだまだできていないことなんです。

神戸のまちとしても、世界中から参加者を迎える中で、様々な問題点が浮かび上がってくるはずです。国際都市、コンベンション都市、アーバンリゾート都市と打ち出している神戸を検証していく良い機会となるはずです。例えば、街中の種々の案内標識も、様々な国からの人達を迎えるには不十分ではないでしょうか。英語表示もまだ十分ではないと思いますが、更に中国語、ハングルなどの表示も必要ではないでしょうか。バスも地下鉄も、初めて訪れた外国の人々が利用できるものになっているでしょうか。こういった整備がごく自然なあたりまえのものとなっていくことが必要ではないかと考えます。神戸には九十数カ国の人が住んでいるわけですが、良く言えば我が関せず、余計な詮索をしない、外人だと言って騒ぐわけでもないというのが神戸のいいところではあるんですが、隣人としての付き合いとして、また、ゲストとして迎える姿勢にしてももう一歩進んだところへいかなければと思います。国内各地からも一万数千人が参加、来神するわけで、その人達がどんな印象、経験を持って帰られるかということも大変に重要なことでしょう。

またコンベンション施設の方はというと、国内諸都市と比べても、よくできていると思うんですが、会議場の最大キャパシティの限界、それに伴う同時通訳設備の問題があります。バンケット・ホールについても規模が限られているなど、まだまだハード面の不足も多いわけです。

そしてもうひとつ、会議開催が秋だということで、これを、神戸の秋のまつりのコア（核）づくりの契機にできないかと考えています。種々の秋のイベントを集中して、「神戸ホリデー」というイメージで再編成していけないかと。アーバンリゾート都市構想というのは、神戸の街の中で楽しむということですが、私達の提唱しているコンセプトと全く同じものであるわけです。神戸の街というのは、ホリデーとして楽しめる要素があるはずなんですが、ただまだ十分に利用できていないんですね。それを大きくくくることができたらいいなと思います。

今いくつか挙げたことも一例ですが、今回の会議誘致、開催は一つの過程であり、その結果得たものを今後どう生かし、先を作っていくかが、神戸JCにとっても、神戸の街にとっても最も重要だと考えています。

●JCI世界会議神戸大会への期待

「神戸ホリデー」の中に位置づけて

阿部泰久
〈(社)神戸青年会議所36代・平成6年度理事長〉

この度JCI世界会議が神戸で開催されるにあたり、まずその経緯について簡略に述べさせて頂きます。

かねてより神戸青年会議所は、新国際都市神戸の創造を趣意として世界会議の誘致を図ってまいりましたが、昭和63年度西村理事長の下で正式に決定後、兵庫県内、近畿地区日本内での承認を頂きJCIでの立候補に至ったわけです。その後、ヘルシンキ大会で'94年度神戸大会開催が決定するまで、永田実行委員長を中心にして海外で神戸のアピールを進めてきました。私としては国内での環境づくりということで、全国各地区毎の理事長に挨拶回りをして、神戸だけでなく日本全体で海外の方をお迎えできるように協力をお願いしてまいりました。

もとより神戸におけるJCの国際会議は初めてであり今回のように百カ国二万人規模の国際会議がかつて神戸で開催されたことはありません。国際都市神戸のコンベンション都市としての機能を充実させてゆくための大きな機会として位置づけられるでしょう。私達神戸JCは「地域のためにお役に立つ」ことをモットーに、人的ネットワークの幅を広げて活動している次第ですが、この世界会議に向けてメンバー全員が一丸となり、単なる政策提言の言葉だけでなく実際に市民の一人として運営に参画してゆくことに意義を見出しています。その過程でJCそのものについて神戸の皆様にもっとよく知って頂き、国際化の中での役割を期待される団体となるための機会でもあると考えています。

もちろんJCI世界会議はJCのためだけに実施されるものではなく、最も大きな目的は日本及び世界から集まってくる多くの人達に神戸の街をよりよく知ってもらうことです。そして神戸を国際的にアピールするとともに、会議を実行することで最終的に「神戸に不足しているものは何か」ということを発見することが大切です。たとえば神戸には音楽ホールがありませんが、コンベンションの後のコンサートをどうするかということも問題になってきます。そういったことが今後の提言となるのです。

期間中、分科会や全体会議を通じ、環境、経済、子供の未来等々各分野における諸問題について討議をし、主張や提言のかたちでアピールをしていくわけですが同時に、先程もふれました様に、開催国個有の文化や開催都市の特性、機能について理解をしていただき、また色々な行事を通じて広くコミュニケーションを深めていただく場でもあるわけです。そういった意味合いからも、従来それぞれ個別に行なわれていた秋のイベントをこれを機会に集中開催し、"KOBE HOLIDAY"といったイメージで統合し、会議開催もその中に位置づけられたらと考えています。そうして広く市民に参加してもらうことにより各種イベント、フォーラム等を充実したものにと考えます。ホームステイや通訳ボランティアの実施なども市民の皆様の協力が不可欠です。会議開催を「神戸のもつ可能性」を追求する最高のチャンスと考えているわけです。

神戸っ子新年号特別インタビュー

神戸っ子 ガンバレ!!

Jリーグ ガンバ大阪

永島昭浩選手 和田昌裕選手

釜本監督のもと、練習に励む。

平成五年五月十六日、華々しく開幕したJリーグ。その後も熱烈なサポーター達の応援のもと、その人気は劣えるところを知らず、〝Jリーグ〟の名は、平成五年度の流行語大賞に選ばれるほど、日本中に浸透しました。

そのJリーグの中で、関西唯一のチーム〝ガンバ大阪〟。そこで二人の神戸っ子が活躍しています。

六月五日に日本人初のハットトリックを達成したエースストライカー永島昭浩選手、そして五月十六日の開幕戦でチーム第一号ゴールを決めた和田昌裕選手です。

Jリーグチーム誘致に向けて市民の会が発足し、神戸市にもサッカー熱が広まりつつある中、二人の神戸っ子にお話を伺いました。

――サッカーを始められたのはいつ頃からでしょうか、又、きっかけは何だったのですか。

永島 小学校四年生の時ですね。もともと僕は野球をしたかったんですけど、野球が五年生からだったので、その間サッカーでもやろうかと思って始めたんです。

和田 僕は小学校二年生の時に、近所の友達に「近くにサッカークラブがあるから一緒にやろう」と誘われたのがきっかけです。

――それからお二人はずっとサッカーをなさってきた訳ですが、Jリーグが開幕したのが今年の5月ですよね。もし、プロという組織が確立しなくても、サッカーを続けるおつもりでしたか。

永島 はい。続けるつもでした。

和田 生活の一部として、もともと好きでずっとやってきましたから、力尽きるまでサッカーをやっていこうと思っていました。

――目標としてきた選手あるいはライバルはいらっしゃいますか。

和田 僕はライバルは持たずにずっとやってきました。たまたまチームに同じ年代の選手がたくさんいて、お互いに励ましあって一生

懸命やってきたので、特にこの選手に負けたくないという意識は持ってないんです。

目標にしてきた選手というか、Jリーグが開幕してジーコ選手がやってきたんだけど、あの年齢であれだけ一生懸命やって、〝プロ〟という意識を我々日本人に教えてくれたという点で彼を尊敬しています。

永島　同感ですね。

――これまでの中で、印象に残っている試合はありますか。

永島　Jリーグの開幕試合です。

和田　僕もそうですね。

――練習はどのくらいなさるんですか。

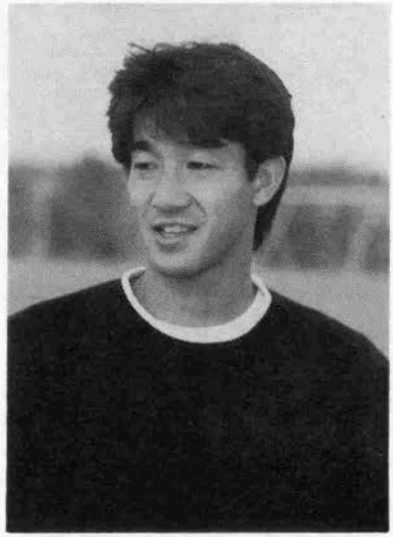
和田　毎日やってます。全体の練習は二時間弱くらいですね。その後、個人的にフリートレーニングをしています。

――ガンバ大阪のサッカーのスタイルはどのようなものでしょうか

和田　中盤をしっかりつないで、最終的には外からセンタリングを上げて、中央の永島に点を取らせるというのが理想的なスタイルですね。

――では、ヨーロッパやブラジルにそれぞれのスタイルがあるように、日本独自のサッカースタイルというのはあるのでしょうか。

和田　ヨーロッパや南米に比べて日本の選手はやはり体型的に華奢

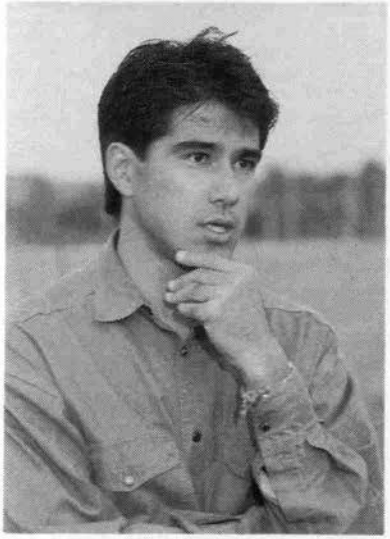


和田昌裕　'65年1月21日生　178cm　65kg
◇ポジション　MF、DF　◇出身校　順天堂大
◇趣味　スキー、ドライブ　◇好きな食べ物　カレー、焼肉　◇好きな色　青、茶
◇好きな言葉　実るほど頭を垂れる稲穂かな
◇好きな女性タレント　ヒロコ・グレース
◇愛車　ベンツ　◇ニックーム　ワダポン

なので、まともに当たったら負けてしまいます。だから、中盤をゆっくりつないで、シュートにいくラスト三十メートルぐらいをトップスピードでいくというように、スピードに変化をつけるサッカーをするのがいいのではないかと思いますね。

永島　その通りですね。スタイルというのは、個々の持ち味によって決まってくるものだし、型にはめてしまうのは難しく、時間のかかることだと思います。メンバーが違えば、違うスタイルができる訳ですし…。そういう意味で、力のある者同志が集まった中で、いかに新しい日本独自のサッカーをつくり上げていくかでしょうね。だから今、和田が言ったように、日本人の肉体・思考に合ったトータルなものをベースにやっていくことが必要だと思います。

——神戸もサッカー熱が高まっていますが、神戸のサッカーをより



永島昭浩　'64年4月9日生　181cm　77kg
◇ポジション　FW　◇出身校　御影工業高
◇趣味　ドライブ、読書　◇好きな食べもの　米果物　◇好きな色　青　◇好きな女性タレント　特になし　◇好きな言葉　特になし
◇愛車　ベンツ　◇ニックネーム　ナガシ、チョーサン

レベルの高いものにするために、何かアドバイスはないでしょうか

永島　小さい子供達にサッカーを教えている熱心な指導者の方々がたくさんおられますから、あとは自治体とか、そういったものが動かないと、大きなクラブ、ひいてはJリーグにつながらないと思います。ですから、地域に根ざしたものとして、街全体がJリーグに向って、力を合わせていく必要があると思います。

和田　やはり、先ず何を母体にするかでしょうね。今神戸にあるチームを母体にして補強していくのか、他のチームを誘致して補強するのか…。(神戸の場合)それがまだ、はっきりしていませんよね。僕としては、神戸にそういうものをつくり上げていこうとするのであれば、清水がそうであるように地元の人達でやっていくのが一番理想的だと思います。

——休日は、どうお過しですか。

永島　リラックスしている時は集中してリラックスしていますし、一日半分サッカーのことを考えている時もあります。

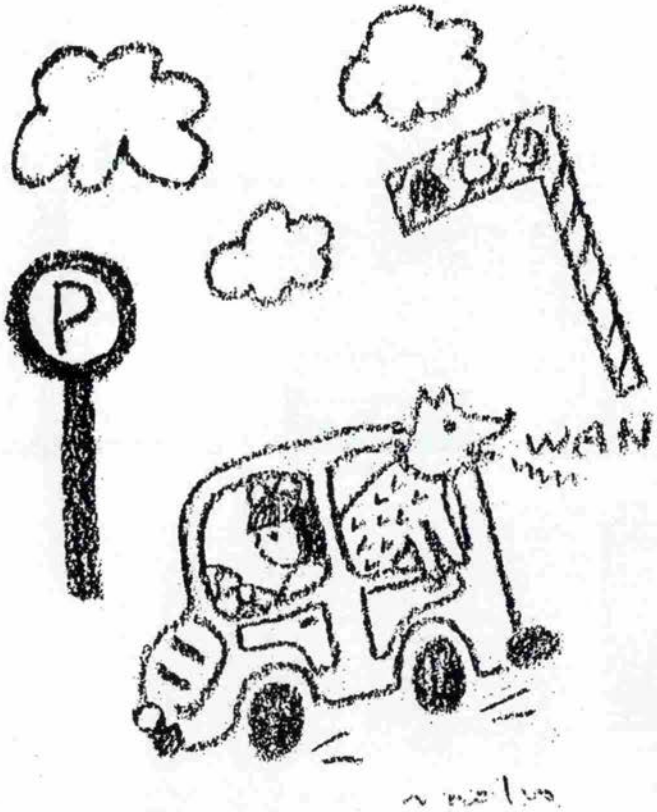
和田　子供と一緒に遊びに行ったりしてます。

——最後に来季の目標、意気込みをお聞かせ下さい。

永島　確実にシュートを決め、ゲームに勝ち、優勝することです。

和田　全試合出場と優勝ですね。

ビジネスに!
ショッピングに!
ご利用ください



磯上モータープール
(神戸国際会館前) TEL (078) 251-2662 (8：00A.M.～11：00P.M.)

●収容台数 350台
●月極駐車可
●年中無休

びっと・いん

★お得なグルメコンチェルトで2人きりの新年会を

「ムッシュSEGAWAと南仏マルセーユの漁師達との想い出ブイヤベース」。想像をかきたてる料理はレストラン　ラ・バーグの特別ディナーコースグルメコンチェルトのメニューの一部。1月31日までワインフルボトル1本がついて、2人で1万円の破格の値段だ。

18年間フランスで活躍した瀬川総料理長が作るブイヤベースは本場の味。南仏の漁師が、とれたての魚をアツアツ鍋にぶちこむ豪快な味が楽しめる。

24階からの夜景と気さくな瀬川さんのお話しもまた絶品。「フランス滞在許可証がなくて、日本に送還されそうになったが、帰国直前に出会ったパリジェンヌが僕の運命を変えることになって…」と、話しの続きはぜひご本人からどうぞ。

南仏の香りが漂う料理

■神戸市中央区浜辺通5―1―14 神戸商工貿易センタービル24F ☎078―251―1961 11時半～21時半（平日は14時～17時休）第1・3日曜休

★ワインでハッピーニューイヤー

「神戸はオシャレな街と言われてますが、ワインの専門店がないのが不思議ですね」とは、神戸初のワインパイオニアショップ『神戸ワインブティック　ROSSO e BIANCO』をオープンさせたばかりの大田社長。

静かな店内には、イタリア、フランス、カリフォルニアを中心に300種類ものワインが並ぶ。種類の多さもさることながら、「自社輸入したものをリーズナブルな価格で提供する」をモットーにしたお値段は嬉しい限りだ。

「ご自分の生まれ年のワインを探しに来られる方もいらっしゃいますね。若いご夫婦なんか、さりげなくシャンパンにリボンを巻いて、お呼ばれの席に持って行かれます。ワインを気軽に楽しんで欲しいですね」

新年のパーティーに欠かせぬワイン。力強い味方が現われた。

外国人の常連客も多い

■神戸市中央区野崎通3―2―13 ☎078―241―0131 9時半～18時半　日祝休

★吟醸と懐石〝玉越〟

三宮から北野坂を30m北へ歩くと、ベーシック北野坂ビルの地下に『玉越』がある。店主・玉越徹さんが長年の夢を実現、吟醸酒と懐石料理の本格派のお店が11月15日にオープン。

オープニングでお祝いに駆けつけた皆さん

料理長は元ブラン・ド・ブランに居た則枝さん。吟味した素材は例えば海のものは徳島から取り寄せている。ぞうり海老など他ではお目にかかれないものもある。コースは5千円～一万円で要予約。お酒は玉越さんが、全国から選りすぐった地酒、英勲、月の桂、梅乃宿、母情などなど。通には嬉しい品揃え。

明るい中に落ち付いた雰囲気の店内は、カウンター、イス席、奥に20名程のお座敷もある。

■神戸市中央区中山手通1丁目8―16 ☎078―334―3606（FAX兼）11時～14時　17時～23時半（コース料理オーダーストップ22時）

地域文化論

〈その170〉
信州高遠美術館
ディテール（詳細部）が
建築の価値を生む
嶋田　勝次〈神戸大学工学部建築学科教授〉

一九九三年夏の学生達とのゼミ合宿は、信州方面への二泊三日で観光バスによるぜいたくな旅行となったし、いくつかのいい新建築を見学して、見聞をひろげることなどが楽しみになって来ていた。その中のひとつにこの美術館を見ることが出来たのは幸いだった。この信州の高遠美術館は城下町高遠町の城跡公園の小高い丘の上につくられたが、この美術館の中からも遠くアルプスを望むことも出来るし、足下に深く天龍川まで見えるという風光には、ぜいたくこの上ないよさである。

建築はコンクリート打放しの壁と黒瓦の切妻屋根は、みごとな和風の構成を生み出している。

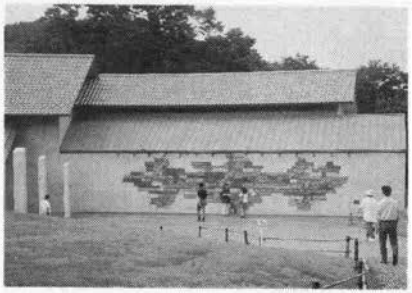
平面は大きな四分の一円形となっているので、あまり曲線の感じは分からないが、それがたくみに人をスムーズに室内にさそい込むようになっており、更に玄関導入壁面が大きなレリーフで形成され印象深いものになっている。會田雄亮作とのことである。

玄関ロビーから休憩ホールと喫茶空間などまで空間が流れるようにつながっていて、展示室に知らぬ間に入ってしまう。

美術館の格式を大切にするこれまでのイメージを変えて来たのは建築家の空間造りのみごとな感覚から来ているのであろう。

ところで、この高遠町がどこに位置しているのか、どんな町であるのか確かめもしないまま、学生達の後からついて行ったので、この町について百科事典にまで掲載されているのを見て、あまりに知らなさ過ぎたことが恥しくも思ったことである。

高遠町――長野県上伊那郡にある町。赤石山脈から流出する三峰・藤沢川の合流点にあり、江戸時代は内藤氏（三万三千石）の城下町で、藩校の進徳館からは明治維新前後に多くの先覚者、学者が出た。諏訪盆地から伊那盆地に通ずる杖突街道に沿い、飯田線開通前は伊那方面への主要路にあたっていた。明治以降、鉄道交通に離れているため、町はあまり発展していない。高遠城跡（高遠公園）はサクラの名所。また流罪でここに没した絵島の墓がある。人口一万六三〇。


切妻屋根とレリーフが印象深い高遠美術館の外観

この美術館を設計したのは宮本忠長建築設計事務所で、ずっと信州を中心に堅実な作風でとどろいている。

和風というか和様というか日本の風土にぴったりと合ったデザイン意識には、吉田五十八にはない力強さにあふれているし、村野藤吾のもっている華麗さとも異なる野性味さえ感じさせてくれるのはふるさとの土壌からの芽生えとでも云えるのだろうか。

私はもっともっと、それこそ建築を支えている基礎にディテール（細部）をきちんと検討しているかどうかがまず大切なのであろうし、それが土となり芽となり花が咲き、実となるのであろうと思っているのである。